

高橋亘先生の思い出

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-10-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 芳賀, 直哉 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00006832

高橋 巨先生の思い出

芳賀直哉

わたしは一九六六年の入学で、特にガリ勉タイプではなかったものの、一年生から教養科目だけでなく、空いている時間帯に開講されていた専門科目も受講した。なにせ、哲学を勉強しようと思つて大学に入学したのだから、こうした入れ込み様もあたりまえだと、当時は思つていた。

そのなかで、高橋先生が三・四年対象に「哲学概論」の授業を担当され、わたしが一年生のときは、西田幾多郎『哲学概論』をテキストにしていた。同じ年に入学してやはり哲学志望の浮穴君と、先輩方に混じつて講義に連なつた。大岩地区の旧制静岡高校なごりの木造建物の小教室で、五く六人の受講生がいたように思う。そのほか、一年次で専門科目「ギリシャ語」も受講した。こちらは山下太郎先生の担当で、山下先生は教養科目「哲学」も教えておられ、こちらも例の浮穴君と「机を並べて」一番前の席で受講した。中庭にあつた一二番教室という大教室であつた。

二年生のとき、教養部は片山に移転し、授業も片山で行われたが、人文学部はまだ大岩にあつたので、専門科目を受講するため自転車で片山―大岩を行ったり来たりした。記憶が曖昧であるが、「中世哲学史」の授業を受講したのは二年次であつたと思う。テキストはE. ジルソンの『中世哲学史』であつた。高橋先生のラテン語の授業を受講したのが二年なのか三年なのか憶えていないが、これも履修した。受講生が二人だけ（沼倉君だったろうか）で、相棒が欠席すると一人だけのことがよくあつた。このように家庭教師のような授業は演習授業でも経験した。英文テキスト

を訳しながら進めるので、当番の相方が休むと、数回はひとりだけの授業となった。

三年生るとき、現在の共通教育棟に人文学部が移転し、授業もすべてここで行われた。「哲学概論」も再度受講し、そのときは三木清の『哲学入門』がテキストであった。演習はアリストテレス『形而上学』やプロティノス『エネアデス』の英訳本が使用された。

わたしは卒論にプロティノス研究をテーマとしたので、特別に講読をしていただいた。

卒論作成のため、先生からIngeの二冊本『プロティノス』という解説書を貸して頂いたとき、無くされると困るから持ち運びはせず、下宿で読むように」と注意されたことが想い出される。学生に貸した本を無くされた経験があったのかもしれない。

大学卒業後、京都の洋書店で現物を購入したものの、修士課程でプロティノス研究を止めてしまったので、結局あまり繙かないままでも書棚にある。

先生の講義スタイルは、何らかのテキストを使用して、重要などころになると、黒板に円や楕円の図を書きながら説明していくスタイルであった。従って、あまりノートをとった記憶がない。山下先生は、対照的に黒板全体を使って必要事項を書くので、学生もたくさんノートをとった。別に意識的にそうしているつもりはないが、自分も授業で高橋先生の講義スタイルになっているのは、不思議である。

先生は、静岡には単身赴任であったことは後で聞いた。下宿は大岩地区にあったそうだが、残念ながらわたしは一度も伺う機会はなかった。ただ、卒業後、東京の松原のご自宅には何度か訪問させていただいた。古い洋館風の建物で玄関が上がって右手の部屋が応接間だったのだろうか、毎回その部屋でお話をさせていただいた。一人で訪問した

こともあるし、竹原君と一緒に伺ったこともある。

伺うと、先生は必ず「いま何を読んでいるのか」と聴かれた。まさか「高橋和己です」とは言えず、「いろいろ」と答えたけれど、哲学関係の話題だけをしたわけではなく、近況とか生活ぶりとかが話題になった。大学教員になって、それまでの神学研究から南方熊楠研究に転向したわたしは、怒られるかも知れないと恐れつつあるときその旨を申し上げたら、「あの人は面白い」という反応が帰ってきてホッとした憶えがある。

あれは、いつのときか忘れたけれど、わたしが静岡大学教養部に勤めることができ数年後、先生は、ドイツ語の書籍を整理したいが、古書店を経由して静大の図書館で購入するようできないか相談があった。一九世紀末から二〇世紀初めにドイツで出版された貴重な文献である。三〇冊ほどであったか、研究費で購入して図書館蔵書の手続きをして、今日に至っている。

現職中から先生は度の強いメガネをかけておられたが、「本の読み過ぎで近視になった、目は大切にしない」と忠告していただいた。わたしは入学のころはメガネの世話にならずにいたが、やがて近視が進んでメガネをかけるようになった。しかし、こども時代からテレビの観過ぎ、漫画の読み過ぎから近視になったので、本の虫でそうなったのではないので、とてもきまりの悪い気分であった。

想い出はとりとめないが、先生の葬儀が執り行われた松原カトリック教会に行ったのは、実は二回目である。奥様の葬儀も同じ教会で行われたからである。奥様にも一度だけお目に掛かったことがある。ご自宅を訪問させていただいたとき、わたしたちに（多分竹原君と一緒に行った）カルピスとカステラを出して下さった。恐縮していたわたしはそのお顔の印象もてないまま辞したのであった。

先生はその風貌からしてやさしい方であった。少なくとも、すでに五五才くらいになられていた当時の先生から、

強い口調で怒られたことはない。

帰天された先生は、かの地においてもやはり本を読んでおられることと思う。